

アドベンチャープログラムの継続活用における 学級に対する生徒の意識変容に関する考察

—公立中学校3年生の事例をもとにして（その2）—

Study on Student's Consciousness Changes to Class for Continuous Use of Adventure Program:
Based on the case of the third grader of the public junior high school (part 2)

大山 剛

Tsuyoshi Oyama

キーワード：TAP、学校教育、人間関係、人権教育、質問紙調査、公立中学校

Keywords：Tamagawa Adventure Program, school education, human relations, human rights education, questionnaire, public junior high school

研究の概要

本研究は、昨年の研究報告「生徒のアドベンチャープログラム導入時における学級所属意識に関する考察」¹⁾を踏まえ、学級に対する生徒の意識を継続的に調査することで、集団としての変容に考察を加え、さらに個と集団の関わりや、アドベンチャープログラムの4つの概念についての変化を、プログラム実施後の質問紙調査で確認し、学校教育におけるアドベンチャープログラムを継続して実施した時の傾向を明らかにしている。

調査の結果、多くの領域で高い数値が示され、アドベンチャープログラムを継続して実施することの効果が確認された。しかし同時に、学年でアドベンチャープログラムを実施する際には、共通プログラムを提供することの長所を踏まえながらも、それぞれの学級の変化に注目して、その違いを考慮しながら進めていくことが、あらためて課題として明らかになった。

1. はじめに—玉川アドベンチャープログラム（TAP）について

玉川大学TAPセンターは学校教育において、アドベンチャー教育を基盤とした体験学習プログラムの開発と実践²⁾を展開し、TAP（Tamagawa Adventure Programの略称で以後TAPと記す）の名称で、体験型教育プログラムや指導者研修を実施している。TAPセンター前身の「心の教育実践センター」は、玉川学園・玉川大学の教育理念である全人教育の一端を担う施設として2000年4月に設立され、学内には国内で初めての規模となるアドベンチャー教育のための施設が常設されており、K-12、大学、大学院生のみならず、教育に携わる（学校教育・社会教育等）指導者を対象とした生涯学習のプログラムの提供はもとより、近年ではスポーツチーム研修等、様々なニーズに合わせた活動を展開している。

TAPの主なねらいは（1）相互尊重（フルバリュー）の心³⁾を学び、（2）内発的動機でチャレ

ンジすること⁴⁾（「人生の開拓者」たること）、（3）自己や集団のVisionに向かって努力していくこと（Adventure）という点⁵⁾を重視して、学習者の成長を促していくことである。上記のねらいをもとに、TAPセンターでは各年齢層の個人やグループのニーズに応じた目標設定を大切にしながら、目標達成を支援するためのプログラムを実施している。これらの活動をとおして社会性や主体的な態度の育成を可能とするTAPは、教育行政機関や学外等の教育機関、企業やスポーツチームからの要望も増加しており、まさに社会のOn Demandのプログラムと考えている。⁶⁾

（付記）本稿ではTAPと表記しているが、過去の研究や文献ではtapと小文字で記述されている。これは昨年度（平成27年度）より大学附置機関としての設置にともない大文字表記に切り替えたものである。したがって、その意味と内容は以前と同様で変化はない。同じくTAPセンターの名称も、本年度からスタートであるが、「全人教育研究所心の教育実践センター」及び「学術研究所心の教育実践センター」の組織編成にともなう変更で、センターの目的に変化はない。

2. 研究の背景と目的

アドベンチャープログラムでは、活動を通して「個と全体」について学ぶことに効果があるという事例が井村（1982）によって報告⁷⁾されているが、小学校や中学校内においてもAITC（Adventure In The Classroom）「アドベンチャーを教室に」という考えに基づいた田所（2005）の報告でも、人間関係を育む効果的な活動事例⁸⁾が挙げられている。また大学でも、中島他（2001）により、コミュニケーションスキルや初年時教育としての有用性、あるいは他者受容感や自己肯定感という観点⁹⁾での研究報告に加え、指導と支援のあり方について、プログラムの効果を日頃の授業実践の中から考察する平野他（2011）の研究¹⁰⁾も進んでいる。加えて最近では一般企業における研修プログラムの成果について佐藤他（2016）の質的な考察¹¹⁾も発表されるようになり、アドベンチャープログラムの実施が、個や全体にどのような効果や影響を及ぼしているかも明らかにされてきた。

こうした中、昨年の年報¹²⁾では、生徒の学級に対する考え方と学級の現状を確認することが、次のプログラム実施において大切な要因になると考えた。調査の結果、学級によって差は見られるが「アドベンチャー」と「フルバリュー」では肯定的に捉えている傾向が見られた。反対に自主性などに支えられる「人生を開拓する」や「課題解決」には消極的である傾向も見られ、学級の実態を踏まえてプログラムを計画することが課題として明らかになった。

そこで本研究では、昨年の報告を踏まえた継続研究の立場をとり、前回の記述に見られる定性的な効果測定をさらに半歩進め、「継続した測定を実施することでアドベンチャープログラムの特性をアクションリサーチ的な実践研究の立場から明らかにすること」を目的にしている。すなわちアドベンチャープログラム導入時を初回調査として、複数回のプログラム実施時に「学級に対する意識調査」を質問紙によって調査し、昨年度と同様の項目である4領域について、その変容を確認しながら特徴と傾向を分析していきたい。

3. 研究方法と先行研究の概略

本研究では昨年に引き続き、E市立E中学校でのアドベンチャープログラム実践にともなう生徒の意識を調査した。調査内容及び質問紙は巻末の資料1のとおりである。これらの質問によっ

て、自分の所属する学級についての生徒の考えを集計していく。昨年度の研究からの継続調査になるので、内容については以下に簡単に記述する。

この調査用紙における項目は私立学校と公立学校のデータ比較も予定されている関係から、玉川大学併設校部門で実施している調査用紙と同じ内容で実施した。これはTAPに関連する川本(2012)の先行研究の結果¹³⁾を根拠として、得点の高いカテゴリーを抽出したものである。すなわちアドベンチャープログラムを実施する上で大切と考えている「1. アドベンチャーする力、2. フルバリューする力、3. 人生の開拓者、4. 気づきを学びに」の4領域の概念について、4段階の評価尺度で測定している。

また、前回の調査同様、田中(2013)が提案している「学級力」の考え方¹⁴⁾に基づき、グラフや集計表は新潟大学教育学部附属小学校の研究¹⁵⁾に準拠させているが、本来、田中が推奨している「学級力」という考え方は以下のように示されている。

「学び合う仲間としての学級をよりよくするために、子供達が常に支え合って目標にチャレンジし、友達との豊かな対話を創造して、規律を守り安心できる環境のもとで協調的な関係を創りだそうとする力」である。

このような定義を受けて、よいクラスといえる状況を表す学級力には、次のような5つの下位能力と学級の具体的な姿が含まれている。

- 領域1 目標をやりとげる力(目標、改善、役割)
- 領域2 話をつなげる力(聞く姿勢、つながり、積極性)
- 領域3 友達を支える力(支え合い、仲直り、感謝)
- 領域4 安心を生み出す力(認め合い、尊重、仲間)
- 領域5 きまりを守る力(学習、生活、郊外)

これはE中学校で人権教育研究推進校として3年前から取り組んでいる教育目標の「豊かな心と自ら学ぶ意欲と力を持った生徒の育成」にも関連性が高いと考えている。そして重点課題としての「豊かな心を育てる諸活動の研究→きまりを守り相手の気持ちを思いやり、人権尊重の精神で行動に表すことができるようにする」というE中学校の行動規範もTAPと関連深い。¹⁶⁾また、前述した学級力におけるカテゴリー設定は上記の通りであるであるが、本研究で以前から設定しているアドベンチャープログラムの領域との関連性も高い。

今回の調査でも、こうした「学級力」に視点を当てながら、同時に類似領域の関係性を意識しつつ、この手法の統計的な手続きとその後の集計に優れていることを前提に活用している。すなわち生徒の意識という質的変容に対して、学級力の検証に開発されたレーダーチャートの手法を適用して、複数回の変化と傾向を、より具体的に可視化することを考えている。学級力の調査法として優れた方法であることは十分に承知しているが、単にそこにとどまるだけではなく、アドベンチャーという視点においても、生徒と学級の間を目に見える形で検証するためにも、極めて有効な検証方法であると考え、昨年に引き続き活用する次第である。言い換えれば単独でTAPを経験するだけでなく、継続された機会を通して「生徒たちが学級に対して、どのようにセルフアセスメントを行い、その結果、どのような学級の形を求めているか」を明らかにしたい。

a. 調査について

(調査対象)

E市立E中学校3年生190名 男子103名 女子87名

(調査日時)

平成28年4月15日、6月13日、8月31日、9月27日、11月7日

※いずれもアドベンチャープログラム実施後の当日に記入。

(調査手続)

アンケート調査は人権教育研究発表校に指定された平成26年度より各学年の生徒に対して実施する機会が多く、生徒は比較的書き慣れている。また調査用紙の内容をE中学校の第3学年主任教諭に提示して、学校長の確認と実施の了解を得るとともに、本研究終了時の調査結果の報告についても承認を得た。また、アンケート実施に際して生徒に配布する前に「学級の傾向を把握することが目的なので名前が出ることはないこと、自由記述の感想も個人名は使わないこと」を学級単位で説明した。また自分のことや友人のことで、書けないことがあれば無理をして記入する必要はないことも補足してから記入調査を実施した。

(配布と回収の方法)

TAP当日の下校時の学級集会に、生徒が各自で記入している。配布と回収は学級担任が担当している。

(回収率)

100パーセント ※ただし190名の生徒のうち、当日欠席生徒を除く。

b. 調査対象の中学校について

E中学校では2014年度2015年度の2年間にわたり、地方自治体教育委員会から「人権教育研究指定校」として研究活動を実施したが、TAPセンターは研究当初から、計画に対するアドバイスや教員研修、あるいは生徒に対するTAP指導について、年間を通してかかわる機会を持ってきた。

今回の調査に該当する第3学年生は、昨年、一昨年とTAPを経験しての中学校卒業年度でもあるので、継続調査の申し入れにともない、学年のTAP実施希望の合意が図られた。その運用としては、第3学年という最上位学年での行事運営、生徒会・クラブのリーダー役としてのTAPの活用、そして何よりも中学生最後の一年を有意義にすごさせたいという願いに基づいて、学校行事前の道徳の時間を中心に展開している。

c. 当日のTAPについて

合計5回の実施に際しては、事前に学級担任からクラスの状況やその時期の学級目標等について聞き取りを行い、当日の基本的なプログラムの中から、学級の様子に応じて内容を選択して対応、進行することとした。下記は5回の概要である。

E中学校3年生TAPプログラム

第1回 4月15日（金）学級活動 各50分 場所 視聴覚室

目的 ①クラスの団結を深めるきっかけとする

②人間関係に不安を抱いている生徒も安心できる学級にする

③来週行う修学旅行班編成に今回の取り組みを役立てる

第2回 6月13日（月）道徳の時間 各50分 場所 学級教室

目的 ①道徳主題 「主として他の人とのかかわりに関すること」

②内容項目 友情・信頼・思いやり・謙虚

第3回 8月31日（水）学年集会 100分 場所 体育館

目的 ①リーダーシップとメンバーシップの伸長

②体育祭における最上級生としての行動と自覚

第4回 9月27日（火）道徳の時間 各50分 場所 視聴覚室

目的 ①体育祭の振り返り ②合唱コンクールに向けて

第5回 11月7日（月）道徳の時間 各50分 場所 視聴覚室

目的 ①クラスの団結を確かめる ②高校進学に向けて ③卒業までに自分ができること

4. 結果

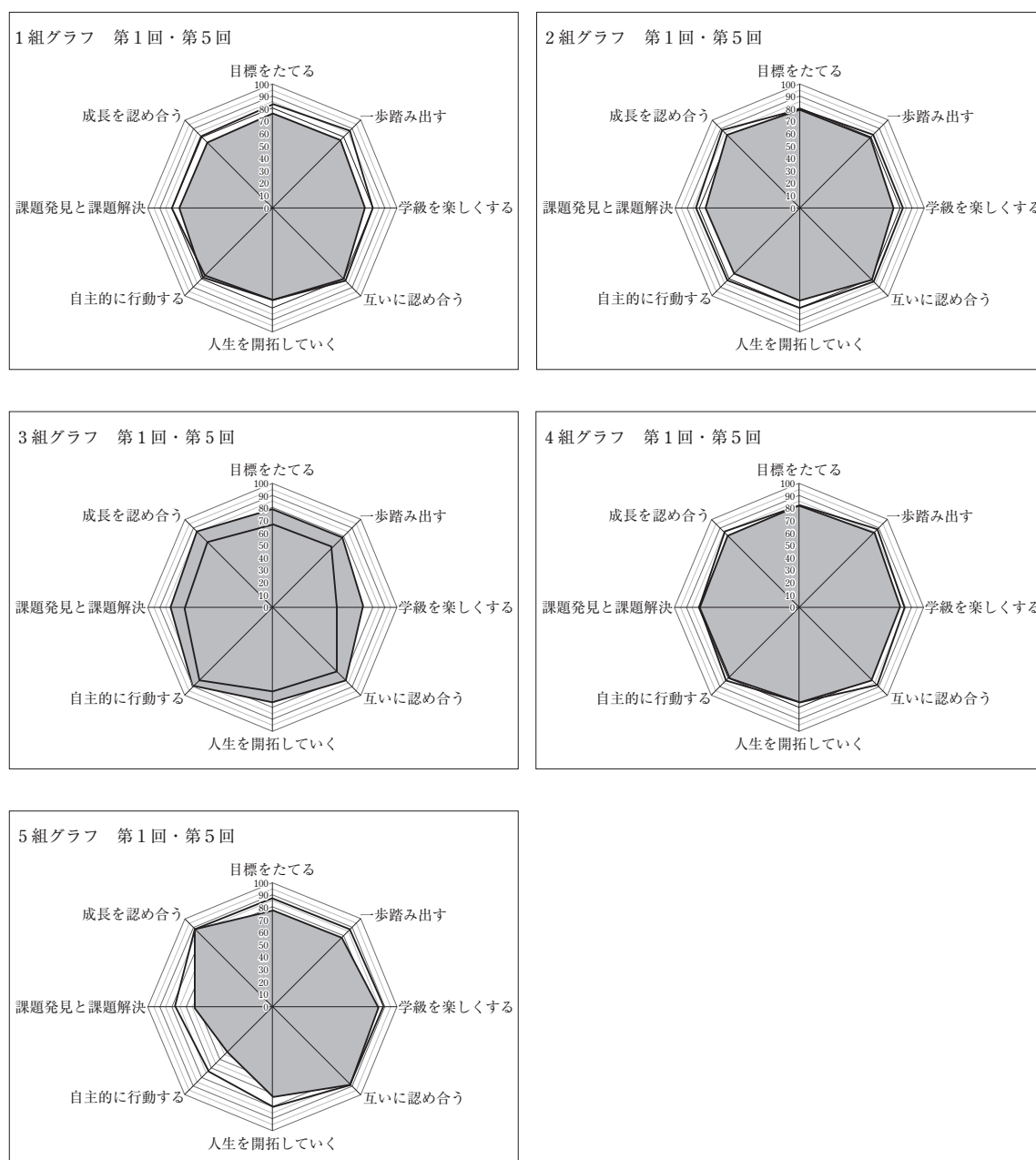
a. 学級の集計グラフ

質問項目の平均得点をレーダーチャート形式でグラフ化すると図1のように表すことができる。得点はパーセンテージで示している。例えば極端な例であるが、学級全員が4をつけたら100%、3をつけたら67%、2をつけたら33%、かりに全員が1をつけたら0%になる。実際にはそれぞれの生徒によって得点が異なるので、それぞれの項目の学級平均を示している。

ここでのレーダーチャートはアドベンチャープログラム導入時4月15日に実施した初回調査の結果（太線）と、最終11月7日の結果（濃色部）を示し、各学級のおおよその傾向を提示する。また前回の報告で記述した通り、TAP導入時の反応として今年度3年生も昨年同様に下記の傾向が示されているが、その詳細について本稿で改めて記述はしない。

1. 学級によって差は見られるが「アドベンチャーする力」と「フルバリューする力」については、どの学級も平均値として1位または2位として上位概念に挙げられている。また、この2つの概念を構成する学級の姿、具体的には「みんなで頑張る目標がある学級だ」、「目標に向かって、一歩踏み出す努力ができる学級だ」、「何でも話せる雰囲気がある学級だ」、「勉強や運動、または生活の中で互いに認め合うことができる学級だ」ということについて、肯定的に捉えている。¹⁸⁾

2. 一方で各学級の上位項目は同一でないケースがあるので、指導者側に立てば「学年全体を傾向として把握しつつも、学級それぞれが同質化されるものではない」ことに留意したい。例えば、「目標をたてる-今、みんなで頑張る目標がある学級だ」で数値の高かった1組と、「互いに認め合う-勉強や運動、または生活の中で互いに認め合うことができる学級だ」に高い数値を示す5組では、生徒の認識の内容や、学級全体での優先意識が異なることを承知しておく必要がある。¹⁹⁾



(図1 各学級のTAP導入時と最終TAPでの集計グラフ)

b. 質問項目の平均得点と得点の推移

次に、各学級の平均得点の変化と推移について記述する（表1～表5）。4月15日から11月7日までの7ヶ月、合計5回の調査を実施して、各項目の変化を学級ごとの表にまとめている。各回の調査の中では、項目の一番高い平均得点を淡色、一番低い平均得点の項目を濃色で表示した。加えて、縦軸で各回の平均値枠を設定してその時の学級状況を、横軸で項目毎の平均値枠を設定して項目毎の値を比較した。また、この項目毎の平均値比較として、最大値は大文字で、最小値は小文字で記している。

3年1組の集計（表1）

3年1組の平均得点

領域	項目	4/15 学級活動	6/13 道徳 (学級)	8/31 学年集会 (体育祭)	9/27 学級 (合唱祭)	11/7 道徳 (最終)	平均 得点
アドベンチャー する力	目標をたてる	83	77	73	80	76	78
	一歩踏み出す	87	80	77	78	77	80
フルバリュー する力	学級を楽しくする	80	80	69	71	75	75
	互いに認め合う	82	81	75	74	81	79
人生を開拓 していく力	人生を開拓していく	74	69	66	65	75	70
	自主的に行動する	78	78	79	78	79	78
気づきを学びに 変えていく力	課題発見と課題解決	81	78	73	70	76	76
	成長を認め合う	81	78	80	73	79	78
平均得点		81	78	74	74	77	

1組では、領域として「アドベンチャーする力」の中で前半は「一歩踏み出す」という項目に87%の平均を示しているが、後半はその数値から下がる傾向にあった。「フルバリューする力」という領域では「互いに認め合う」という項目で、80%を越える数値を示している。また、「人生を開拓していく力」の領域については、各回の調査で最下位の平均得点を示している。期間を通じて相対的に平均得点が上の項目は「一歩踏み出す」の80%平均。領域としては「アドベンチャーする力」が79%を示している。反対に平均得点で「人生を開拓していく」の項目で70%、結果、領域としても「人生を開拓していく力」で74%の数値を示した。

3年2組の集計（表2）

3年2組の平均得点

領域	項目	4/15 学級活動	6/13 道徳 (学級)	8/31 学年集会 (体育祭)	9/27 学級 (合唱祭)	11/7 道徳 (最終)	平均 得点
アドベンチャー する力	目標をたてる	79	83	79	83	79	81
	一歩踏み出す	84	84	84	83	80	83
フルバリュー する力	学級を楽しくする	83	77	80	82	77	80
	互いに認め合う	85	84	77	79	82	81
人生を開拓 していく力	人生を開拓していく	80	76	73	79	76	77
	自主的に行動する	82	85	79	79	75	80
気づきを学びに 変えていく力	課題発見と課題解決	84	83	83	85	77	82
	成長を認め合う	89	86	83	81	83	84
平均得点		83	82	80	81	79	

2組では、領域として「アドベンチャーする力」の中で「一歩踏み出す」という項目で83%、気づきを学びに変えていく力の領域の「成長を認め合う」の項目に84%の平均得点を示している。また、「人生を開拓していく力」の領域については、「人生を開拓していく」に70%台の平均得点を示していることが多い。領域としては「アドベンチャーする力」が82%、「気づきを学びに

変えていく力」が83%の平均得点を示している。

3年3組の集計（表3）

3年3組の平均得点

領域	項目	4/15 学級活動	6/13 道徳 (学級)	8/31 学年集会 (体育祭)	9/27 学級 (合唱祭)	11/7 道徳 (最終)	平均 得点
アドベンチャー する力	目標をたてる	66	82	70	80	78	75
	一歩踏み出す	69	84	65	77	79	75
フルバリュー する力	学級を楽しくする	50	67	63	64	72	63
	互いに認め合う	73	82	71	80	83	78
人生を開拓 していく力	人生を開拓していく	68	75	65	70	77	71
	自主的に行動する	83	90	84	83	90	86
気づきを学びに 変えていく力	課題発見と課題解決	71	82	75	75	82	77
	成長を認め合う	75	87	68	77	87	79
平均得点		69	81	70	76	81	

3組では、領域として「人生を開拓していく力」の中で「自主的に行動する」という項目が期間を通して86%の平均を示している。一方で「フルバリューする力」の中で、「学級を楽しくする」の項目は、期間を通じた平均で63%の数値を示している。また、各項目の時間経過による変化には、時期による上昇下降の変化があるものの、いずれの項目も4月当初の平均値より高い平均得点を示し、どの領域についても得点が上昇している。

3年4組の集計（表4）

3年4組の平均得点

領域	項目	4/15 学級活動	6/13 道徳 (学級)	8/31 学年集会 (体育祭)	9/27 学級 (合唱祭)	11/7 道徳 (最終)	平均 得点
アドベンチャー する力	目標をたてる	83	81	83	86	82	83
	一歩踏み出す	89	88	82	86	85	86
フルバリュー する力	学級を楽しくする	85	84	85	82	81	83
	互いに認め合う	89	84	84	80	82	84
人生を開拓 していく力	人生を開拓していく	76	76	77	78	75	76
	自主的に行動する	83	75	78	75	81	78
気づきを学びに 変えていく力	課題発見と課題解決	81	82	80	77	80	80
	成長を認め合う	86	86	84	80	83	84
平均得点		84	82	82	81	81	

4組では、領域として「アドベンチャーする力」の中で「一歩踏み出す」という項目が期間を通じて86%の平均を示している。一方で「人生を開拓していく力」の領域については、各回の調査でどちらかの項目が最下位の得点を示している。したがって、期間を通じて平均得点の高い項目は「一歩踏み出す」であり、領域としても「アドベンチャーする力」が80%以上の平均得点

を示している。平均得点で低いのは「人生を開拓していく」と「自主的に行動する」の項目で、領域としても「人生を開拓していく力」で76%、78%の数値を示した。

3年5組の集計（表5）

3年5組の平均得点

領域	項目	4/15 学級活動	6/13 道徳 (学級)	8/31 学年集会 (体育祭)	9/27 学級 (合唱祭)	11/7 道徳 (最終)	平均 得点
アドベンチャー する力	目標をたてる	87	77	83	81	78	81
	一歩踏み出す	88	69	82	82	78	80
フルバリュー する力	学級を楽しくする	89	81	78	82	86	83
	互いに認め合う	89	81	84	79	89	84
人生を開拓 していく力	人生を開拓していく	81	69	72	73	72	73
	自主的に行動する	76	51	64	56	51	60
気づきを学びに 変えていく力	課題発見と課題解決	83	64	69	70	63	70
	成長を認め合う	91	83	74	80	89	83
平均得点		86	72	76	75	76	

5組では、領域として「フルバリューする力」に83%以上の平均得点を示す機会が多かった。「学級を楽しくする」「互いに認め合う」という項目に83%、84%の平均を示している。また、「人生を開拓していく力」の領域の中で、「自主的に行動する」については各回の調査で最下位の得点を示している。同時に「成長を認め合う」の項目では平均で83%の数値を示し「気づきを学びに変えていく力」の領域での高低の様子が認められる。平均得点で学級内の評価が低いのは「自主的に行動する」の項目で60%。領域としても「人生を開拓していく力」でも低い数値を示した。

c. 自由記述について

昨年に引き続き今回の調査も自由記述のスペースを設け、TAP全般について「今日の感想」という項目で生徒が記入した。記入は各回各学級20数名の記入で、内容も数文字から長文まで多岐にわたった。生徒の感想に傾聴することで、今後のTAP開発の一助とともに指導者へのフィードバックになるので継続している。自由記述の内容は今後も分析を進めていく必要があると考えているが、前回の研究でも示したように²⁰⁾その多くは昨年と同様、今後の研究を前提にしたプレ調査としての立場にとどまることを付記しておく。

5. 分析

本研究では、昨年の研究報告を踏まえた継続研究の立場をとりながら、前回の調査に加えて、「継続した測定を実施することでアドベンチャープログラムの特性を実践研究の立場から明らかにすること」を目的にしている。「アドベンチャーする力、フルバリューする力、人生の開拓者、気づきを学びに」の4領域の概念について、複数回の継続調査を実施することで生徒の意識の変化を確認した。

概要を述べれば、特に「アドベンチャーする力」と「フルバリューする力」の領域が他の2領

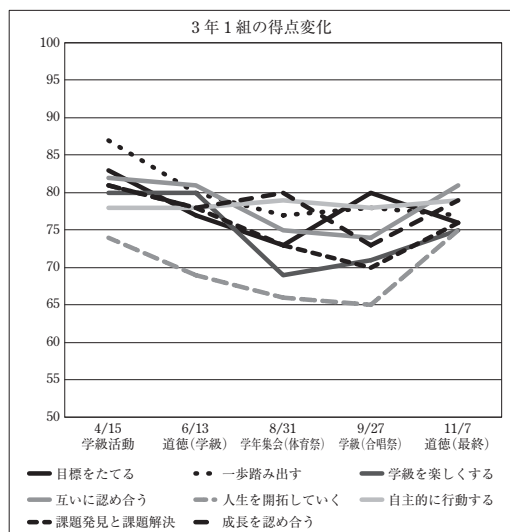
域と比較して相対的に高い得点が示されており、領域の得点の高低が見られた。そこで前章の「b. 質問項目の平均得点と得点の推移」で示した表1～表5の数値をグラフ提示して（図2～図6）、分析の補助として活用を図り、今後のアドベンチャープログラムの展開へと繋げたい。

1) 調査対象の5学級のうち3学級では、平均80%を超える数値を示す領域が見られ、個々の生徒が、所属する学級に対して肯定的な捉え方をしていることが明らかになった。例えば2組と4組では、4領域のうち「1. アドベンチャーする力」「2. フルバリューする力」「4. 気づきを学びに変えていく力」の3領域で80%を超え、5組でも「1. アドベンチャーする力」「2. フルバリューする力」の2領域で超えている。細かく見れば、時期的に上下の変動もあり、個々の生徒によって回答は異なるが、上記の領域については、クラスを肯定的に捉えている傾向が見られた。要因として考えられることは「1. この学年が1年生であった一昨年（2014年度4月）から人権教育研究校の研究アプローチとしてTAPを導入したこと。2. そのTAPの基本理念であるアドベンチャーやフルバリューという言葉に示される内容や考え方に触れる機会が多かったこと。3. さらに研究終了後の今年においても継続的にTAPを実施して、それらの言葉が概念として浸透していること。4. 結果として個人の行動や学級の様子を各々の生徒が考える際の評価尺度としての役割（共通認識の設定）をはたしていること」の4点が考えられる。

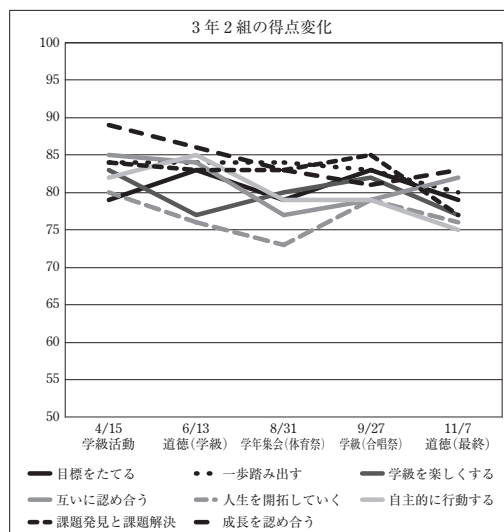
2) 上記1に加え、「気づきを学びに変えていく力」の領域に最高得点を示す2組のような例も見られた。また、項目の得点に絞って述べれば「成長を認め合う」という項目では、1組や2組、5組で、それぞれに時期は異なるが、しばしば学級の最高得点を示すことが多い。その要因について今回の調査を通して明らかにされる部分は少ない。しかしながら一般的な中学校3年生の傾向を考えると、2年生時に比較して精神的な成長が促され、他者を客観的、好意的に捉えることができる時期であることも関係していよう。この傾向は学年前半の調査では女子が高い傾向、そして男子も後半にかけて増加する傾向も集計段階の印象として感じているが、こうした男女差については、今後の継続調査を通して、さらに明らかにしたいと考えている。

3) 一方で「人生を開拓していく力」の領域については、3組を除く4学級で、一番低い得点を示している。項目でみた場合、「人生を開拓していく」では、1組が毎回の調査で最低得点を示し、2組と4組でも半数が最低得点である。しかし「自主的に行動する」については、5組のように毎回最低得点を示している場合もあるものの、3組では毎回最高得点を示し平均でも85%を越す場合も見られた。この部分についてはあらためて6章の考察において記述する。昨年の調査研究でも「人生を開拓する力」は、多くの学級で低い得点を示すことを報告しているが、「その背景や個々の生徒の状況を含めて、プログラムを進める必要がある。」と述べている。²¹⁾勿論、この段階だけの傾向を持って結論するのは早計であるが、この質問項目は、本学の中学生との比較を念頭において計画され、本学の理念に照らし「開拓」という言葉を設定していることも事実である。したがって、上記の1)で述べていることは反対に「人生の開拓者」という文言にE中学の生徒の概念形成においては、あまり馴染まないということも考えられるので、次回以降の課題としたい。

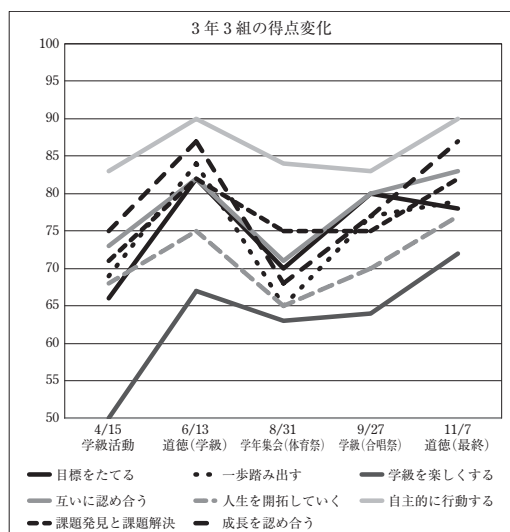
4) 4章の図1「各学級のTAP導入時と最終TAPでの集計グラフ」によるレーダーチャートの形でも、また図2～図6の「各学級の得点変化」のグラフで示した結果でも、11月最終の結果が、必



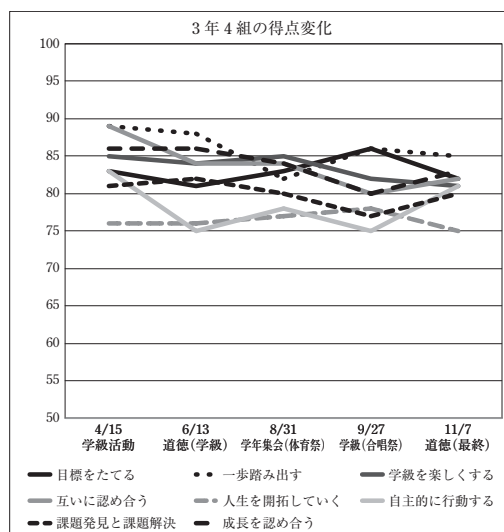
(図2)



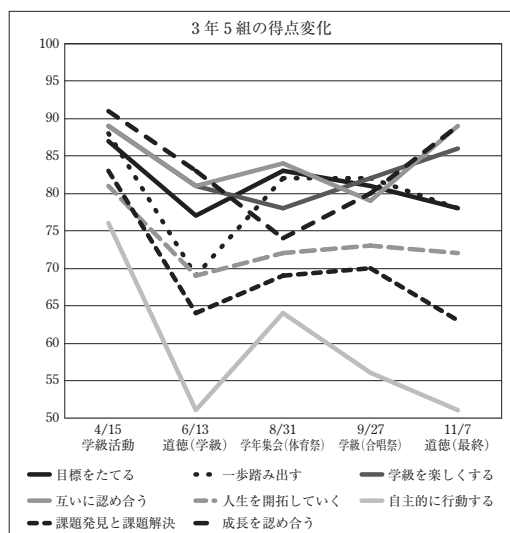
(図3)



(図4)



(図5)



(図6)

ずしも4月当初の各得点を上回っているとは言えない学級は1組、2組、4組、5組の4学級であった。数値として比較すればその差は明らかであるが、それだけでアドベンチャープログラムの有用性について結論を導くのは早計であると考えている。そこでこの部分については、あらためて次章の中に含めて記述する。

6. 考察

学級差をどのように捉えてプログラムに反映していくのかという視点は、プログラムの継続活用において指導者として欠かせない問題であることはいうまでもない。しかしながら、こうした調査では

数値の高い学級=優秀な学級、数値の低い学級=あまり良くない学級として受け取られることがあるので、それらの認識は生徒にも指導者にも正しくない考え方であることも理解させたい。TAPは集団の中で個がどのように関わるのかというプログラムで実施の際に留意したい事柄である。²²⁾

ということが忘れられるので、あらためて記述しておく。

上記の視点は、E中学で学級担任の教員も4月当初から持ち続けている大切な考え方であり、同時にアドベンチャープログラムを実施するにあたり、生徒たちに望んでいる「願い・思い」でもあろう。4月当初の担任教員は下記のような気持ちでプログラムを活用したいと考えていた。

4月15日（第1回）

- ・超マイペース型の支援の生徒が多い（大きな声を出す、スローペース、がんこなど）ので、それぞれの個性を大事にできるように、認め合えるクラスにしたい。
- ・まだ恥ずかしがっている生徒も多く、お腹の底から声を出させたい。
- ・APを通じて、「話をしっかり聴く」体制を作れたら良いと思う。また、自己主張が弱い生徒への配慮ができるような関係作りを要望します。
- ・和やかで、とにかく温かい雰囲気のあるクラスを目指している。友だちの失敗に寛容になれ、励ましあえるようになって欲しい。担任と生徒の関係も深めたい。
- ・気が遣える。コミュニケーションがとりやすいようになる。（順不同）

しかしその後のプログラム実施において、担任教諭が生徒に望む「願い・思い」にも変化が出ている。例えば6月のプログラム前に担任から寄せられた内容は以下の通りであるが、生徒や学級の様子について理解が進むほどに、その内容は、より具体的であり、様々な学級の事象から導かれた要望であるといえよう。

6月13日（第2回）

- ・思いやりの気持ちを行動に移せずにいる生徒が多いので、自然に思いやりの気持ちを行動に移せるようになってほしい。相手のことを思って行動できることの素晴らしさを伝えたい。
- ・人を認め合う心を育てたい。個々は全て違うといったことを理解させたい。

元気が出てきたが、あまり考えずに言葉を言う生徒があり、話を聴きあえるクラスに成長できると良い。

- ・周りの人に気を配れるようになってきている。(声をかける、話をしっかり聴くなど) 現在は修学旅行班で2～4人組の仲良しで一緒になっている。互いに良い面が出ているようである。
- ・利害関係(自分と仲が良い、力関係)にこだわらず、心から相手を応援したり、励ましたりできるようにしてほしい。そして、常に周囲に支えられて生きている自分に気づき、感謝の意を素直に表せる生徒になってほしい。(順不同)

このように、学級担任の教諭においては、学級における生徒の行動や変化に配慮して、その観察に伴った判断と指導、助言等、様々な働きかけによって、その学級を望ましい方向に変えたいと考えていることは言うまでもない。しかし同様に、そこに所属している生徒自身もその気持ちを持っていることも忘れてはならない視点である。すなわち、学級担任が望ましい学級を作ろうと考えていると同じく生徒もまた、自分の考える良い学級を作ろうと考えているのである。このことは前回の報告にもあるので本稿では省略するが、生徒の自由記述感想でも分かるように、各自が学級に対する自分の立場や人間関係を考慮しながら、学級としてより良い形を考えていると言える。すなわち、TAPにおける活動とその結果を、毎回同一の質問紙記入することによって、「生徒自身が学級に対するアセスメントする機会」となっていると考えられる。例えば、前述の図1で示しているが、初回の調査結果に比較して最終TAP後の調査結果が低い数値を示しているのも、同じ視点から自分たちの学級を自分なりに評価することでより客観的に、言葉を変えればより厳しく精査する感覚が生徒自身に身についてきたと言える。

そして、学級担任の考える学級のあり方と、生徒が考える学級のあり方を把握した上で、その共通性とズレを見つけ出すことが、次の目標を考える上で重要となるであろうし、その目標設定から次の活動に進め、さらに担任と生徒の同時アセスメントによって共通性とズレを確認すること。この作業の継続が「学級に所属するということ」の原則であり基本と考えたい。したがって、TAPの継続実施においては、学年全体を把握しつつ、各学級を同質化しないで、各々の学級の変容の特徴を把握することを大切にしたい。いつも前向きな意見の学級もあれば、静かに見えて実は内的的活動が活性化されている学級もある。その学年の雰囲気や方向性は大切な要件であるが、同時に学級差があること、その学級の指向性や傾向に注目して、「成長に向けて支援し、奨励し、積極性を重視するような成功体験志向」という考え方²³⁾が必要になると考えている。

例えば3組は、学級の平均得点傾向が他の4学級とは、少し異なった傾向を示している。得点の最高が80%を超える回数も少なく、他の学級と比較して70%台を推移することも多い。しかし一方で、領域として他の学級で低かった「人生を開拓していく力」の領域における「自主的に行動する」の項目が、常に最高得点を示しており、反対に他学級では高得点の「学級を楽しくする」という項目はいつも最低得点であった。加えて、4月当初の調査では69%という低い得点だが、最終11月の調査では81%を示し、学年で一番高い伸びを示していることも事実である。

得点の違いだけで言えば前章で述べたように、11月最終の結果は4月当初の数値として比較すればその差は明らかである。したがって、今回は質的調査が基本としても、この点については、さらにデータを加えて、アドベンチャープログラムの有用性について定量的な調査も進めていく必要を切に感じている。

しかし同時に、こうした得点の平均や分布、あるいは伸び率の違いは、その学級がその時その

時に、何を目標としているか、どんな規範が設定されているのかによって変わってくることが多いと考える。その違いは担任が学級に向き合う時の姿勢であると同時に、その学級の特徴であり、その各々を意識して確認することが、実はアドベンチャープログラムが学校教育の中でも有効な方法であり、重要な要件であると考えたい。

それは最終TAP前の各学級担任の言葉からも読み取れる。多くの学校行事を、最上級生としての自覚を持ち、責任を果たし、各自が進路について真剣に向き合う11月の時期において、さらに良い学級と各自の成長を目指した願いであることが下記からも読みとれる。

11月7日 第5回

- ・活発な生徒の発言が、授業に静かに取り組みたい生徒には騒がしく聞こえる。集中できなかったり、教師の解説が聞こえにくくなることもある。「意見を聴く」「欲求を抑える」面でのスキル向上を図りたい。
- ・2大行事を終えたところで席替えをすると、自分の班のメンバーを見て、相手の気持ちを想像せずに、自分の好き嫌いを表現してしまうものがありました。大変残念な感じです。
- ・男子は明るく優しい気持ちで人と接するが、リーダーの指示でまとまるのが苦手。女子は気が強く、いくつかの小グループに分かれてしまっており、積極的にクラスに関わるのが少ない。リーダーの指示でまとまろうとする気持ちは全員が持っていると思う。他者を認めながら、自己を成長させられるつながりを実感させていきたい。
- ・合唱コンは賞をとれなかったが、すごく良かった。集団として、だいたいほんわかと良い感じになってきたが、まだなじめない生徒もいる。そういう生徒にも学級のつながりを実感できるようにしたい。
- ・体育祭で、すべての競技でビリになり落胆したが、みんなの『ゴールはひとつ』（合唱コン、球技大会、進路など、何があってもばらばらにならないで、気持ちをひとつにして卒業しようということ。）と決め、合唱コンの練習に心をひとつにして取り組んだ。自分たちでも納得のいく仕上がりとなり、当日も力を発揮できた。生徒同士の関係も以前より深まっている。支援が必要な生徒も受容されている。しかし、教師の働きかけは常に必要である。（順不同）

今回の調査から、TAPを継続して実施することの効果として、多くの領域で80パーセントを超える高い数値を示していることが明らかにされた。「アドベンチャーする力」と「フルバリューする力」の領域では、多くの学級で肯定的な評価が示され、「気づきを学びに変えていく力」の領域でも高い得点を示す学級があった。一方で、「人生を開拓していく力」の領域における「自主的に行動する」の項目で他の学級とは反対の傾向を示す学級も認められた。したがって、TAPを学年で実施する際には、共通のプログラムを提供することの長所を踏まえながらも、それぞれの学級の変化に注目して、その違いを考慮しながらプログラムを進めていくことが課題として明らかになった。また、男女差をどのように捉えるのか、あるいは文言としての「開拓」という領域についても、次回以降の課題として、さらに明らかにしたいと考えている。

そして、これらの実践と調査データを重ねていくことで、当初からの課題である指導者養成の問題や導入以降の継続性を保証できればと考える。アドベンチャー教育の指導者に求められる資質は、「人と人との関わり」を様々な感覚で総体として把握する能力であり、体験教育の立場からも総合的に考えることが求められる。2000年設置の頃とは施設や運用にも大きく変化が表れ

ている。端的に述べれば「アクティブ・ラーニング」という次世代の教育に欠かすことのできない総合的な展開は、実はTAPで大切にしてほしいと願っている、アドベンチャー教育の理念そのものであると考えている。

謝辞

今回の論文執筆にあたって、校長先生のご理解のもと、第3学年主任の先生ならびに学級担任の先生、記録担当の先生、一昨年以来、親交をかさねていただいている数多くの先生に大変お世話になりました。E中学校において日々の教育実践に取り組まれている先生の姿勢に、毎回、感銘を受けました。そして何より今回のTAPに取り組んでいたE中学校3年生の皆さん、どうもありがとうございます。今後の皆さんのご活躍を祈念しつつ、関係の皆様にあらためて深く感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- 1) 大山剛 「生徒のアドベンチャープログラム導入時における学級所属意識に関する考察」玉川大学TAPセンター年報 第1号 2016年 pp.39-54
- 2) 難波克己 「動き出した心の教育—玉川アドベンチャー教育の取り組み—」玉川大学学術研究所紀要 第12号 2006年. pp.107-114
- 3) ディック・プラウティ、ジム・ショーエル、ポール・ラドクリフ『アドベンチャーグループカウンセリングの実践』プロジェクトアドベンチャージャパン訳 みくに出版 1997年 第2部5章 p.106
- 4) 前掲書3) 第2部6章 p.151
- 5) 工藤亘 「tapのインターンシップ経験で習得した能力や要素についての一考察」教育実践学研究 第17号 2013年 p.13
- 6) 大山剛 「Tamagawa Adventure Programの15年間と現在の取り組み」プロジェクトアドベンチャージャパン創立20周年記念シンポジウム発表資料 2015年
- 7) 井村仁 「アドベンチャー・プログラム経験が中・高校生の自己概念と不安に及ぼす影響」筑波大学体育科学系紀要 第5号 1982年 pp.59-70
- 8) 田所三佳 「心の冒険教育の考え方を生かした学校作り」高知県教育センター研究報告 2005年
http://www.kochinet.ed.jp/center/research_paper/h17_center_students/tadokoro.pdf 2016年12月1日現在
- 9) 中島弘毅、大内義昭、神谷明宏、月橋春美 「プロジェクト・アドベンチャープログラムが女子大生の内発的動機づけに及ぼす影響」聖徳大学研究紀要 人文学部 第12号 2001年 pp.71-75
- 10) 平野智之、奥田絢子、佐藤直樹 「体ほぐしの運動によるなかまづくりが児童の自己肯定意識に及ぼす効果」宇都宮大学教育学部 教育実践総合センター紀要 第34号 2011年 pp.207-214
- 11) 佐藤冬果、渡邊仁、井村仁、尾崎智哉 「社員研修としての野外教育プログラムに関する自伝的記憶」日本野外教育学会 第19回大会研究発表抄録 2016年 pp.18-19
- 12) 前掲書1)
- 13) 川本和孝、白山明秀、吉田充志 「玉川大学における tamagawa adventure program (tap) の活用と効果—学士力を中心として—」玉川大学学術研究所紀要 第18号 2012年 pp.37-44
- 14) 田中博之『学級力向上プロジェクト 小・中学校編』田中博之編著 金子書房 2013年 第1章 pp.1-22
- 15) 新潟大学教育学部附属新潟小学校著『学級力で変わる子どもと授業』明治図書 2010年
- 16) 前掲書1) p.41
- 17) E市立E中学校「全県人権教育—研究発表資料」2015年11月 pp.1-3
- 18) 前掲書1) p.50
- 19) 前掲書1) p.50
- 20) 前掲書1) pp.51-52
- 21) 前掲書1) p.41
- 22) 前掲書1) p.51
- 23) 大山剛 「玉川学園の adventure programの取り組み」プロジェクトアドベンチャージャパン10周年記念シンポジウム発表資料 2005年

資料1（調査用紙）

平成27. 28年度	TAP-学級アンケート
月 日 () 組 番 名前	
◆それぞれの質問に、1～4の数字に○をつけましょう。	
4：とてもあてはまる	3：少しあてはまる
2：あまりあてはまらない	1：まったくあてはまらない
〈アドベンチャーする力〉	
①目標をたてる	
今、みんなで頑張る目標がある学級だ。	4-3-2-1
②一歩踏み出す	
目標に向かって、一歩踏み出す努力ができる学級だ。	4-3-2-1
〈フルバリューする力〉	
③学級を楽しくする	
何でも話せる雰囲気がある学級だ。	4-3-2-1
④互いに認め合う	
勉強や運動、または生活の中で互いに認め合うことができる学級だ。	4-3-2-1
〈人生を開拓していく力〉	
⑤人生を開拓していく	
自分に苦手なことや、人が嫌がる事に進んでチャレンジすることができる学級だ。	4-3-2-1
⑥自主的に行動する	
先生に言われなくても、自分たちでルールを守りながら生活できる学級だ。	4-3-2-1
〈気づきを学びに変えていく力〉	
⑦課題発見と課題解決	
学級の課題を自分たちで発見し、それを解決していくことができる学級だ。	4-3-2-1
⑧自分たちの成長を認め合う	
自分や学級の成長を互いに伝え合い、認め合うことのできる学級だ。	4-3-2-1
※今日の感想を自由に記述してください。	